

広瀬旭荘の天保十五年正月詩の周辺

―「肅舎」取得と江戸開塾―

月 野 文 子

一

天保十四年十二月下旬、江戸に留まることを決意した広瀬旭荘は浜町の一隅の久松丁と呼ばれる所（旭荘の漢文体の日記『日間瑣事備忘録』では「濱街久松坊」と記す）に屋敷を購入した。正確にいうと、購入したのは建物のみであって土地は借地である。この年の夏に江戸へ出てから半年足らずの間に、水野忠邦の改革が頓挫して世情は大きく変わったため、仕官のことも当初の目論見どおりには行かず、さらに時間が必要となったのである。旭荘が江戸での開塾を決意したのは、この辺の事情と深く関わっている。

本稿では、旭荘の日記『日間瑣事備忘録』（以下、『瑣事

録』と略称^{〔注1〕}）を読み解いて、江戸開塾を決断した旭荘が「肅舎」と名付けられる塾舎と住居を手に入れるまでの経緯を確認し、さらにその建物の構造にも焦点をあててみる。住宅取得に関する詳細な記録はあまり残されておらず、一連の記述は江戸後期の在野の儒者の日常と住宅事情を知るうえで貴重である。また、旭荘の行動と意識を分析することは、その頃の彼の作品を解釈する上で幾許かの参考となると思われるからである。旭荘は毎年、元旦に詩を賦しており、『梅墩詩鈔』に収められているのであるが、浜町の新居に入った直後の天保十五年正月の作は、それ以前の数年間のものとはかなり作風が異なるのである。それが心境の変化によるものであることは言うまでもないだろう

う。

さて、当時、諸藩があらたに人材を登用するのは儒者と医者、あるいは財政改革に必要な特別の知識をもった人物くらいのものであった。江戸で評判の人物が推挙されたり、藩邸に招聘されて儒学を講じるような機会を得たりして、その中から運のよい者が仕官できたのである。幸いにも、旭莊の名は既に江戸の文人の間でも知られるようになっていた。それは日田の咸宜園の評判の故でもあり、旗本羽倉簡堂〔注2〕らの積極的な吹聴があったからでもあるらしい。この点については前稿でも触れた。〔注3〕ところが、旭莊を召し抱えようとしていた水野氏が失脚したため、改めて今後の事を考えなければならなかったのである。

旭莊のために仕官の推挙役を申し出る者も何人かいたらしく、この頃の作品の中で「縦令、良媒ありて彼の美に通ぜんも」(題春川釣魚図)と表現しているし、『瑣事録』の記述からもそのあたりのことは読み取れる。だが、旭莊はただ仕官の口を求めていたのではなく、藩主の側近として藩政を改革するような地位の藩儒となることを望んでいたらしい。それは生家が大名貸しをするほどの財力を持ち、実際に、兄広瀬久兵衛(南陔)が西国郡代のもとで新田開発や土木工事を補佐し、九州諸藩の財政再建に関わるのを身近に見てきた旭莊にとってみれば、決して高望みではな

かったのだろう。禄高はともかくも、経世済民のために手腕を振るうことのできる地位を求め、なおかつ、仕官先を自分なりに吟味するつもりでいたようであるから、長期戦の構えが必要だったのだろう。格式と対面を保ちながら、好機を待つためには、一流の儒者であることを標榜できるような生活基盤が必要であつたと思われる。

江戸に出てからの旭莊は府内藩邸内に寓居していた。この年五月、旭莊は大阪から江戸へ出るにあたって、旅の便宜上、府内藩の藩士としての扱いを受け、〔注5〕兄久兵衛および府内藩の一行と共に江戸へ着き、そのまま藩邸内の武士の住居〔注6〕に居たのである。このような特別の計らいを受ける事ができたのは兄久兵衛が府内藩の財政再建問題に深く関与していたからに他ならない。しかし、仕官のことに時間がかかるとなると、日常の行動もそれに合わせて変えねばならない。諸藩の人士あるいは幕府の儒官や医官と交わるにしても、私塾を開くにしても、これまでのように府内藩邸に寄寓してたのでは積極的に行動しにくいと感じることも出てきたのであろう。『瑣事録』を見る限り、旭莊は府内藩邸に僑居中もかなり自由に行動しており、しばしば夜間の外出もしていたし、外泊することも少なくなかった。とはいっても、旭莊を訪ねて行く側としては憚られるようなこともあったのだろう。少なくとも、大勢が集まって議

論したり、詩会を開いたりすることは難しかったろう。実際に、江戸へ出て半月ばかり経た頃に、知人吉澤雄之進^{〔注7〕}に「文人不得相往来請移我家」（文人たちが行き来しにくいから、どうぞ私の家へお移りなさい。Ⅱ『瑣事録』六月十五日条）と勧められ、兄と相談すると答えている。しかし、この時点では、水野氏に召し抱えられるつもりでいたので、行動を起こさなかったのである。

二

結局、仕官の一件は沙汰止みとなったが、そのまま江戸を拠点として活動することとなり、住居探しとなったのである。天保十四年十一月下旬に屋敷購入の契約は成立し、一ヵ月後には新居に入った。旭荘が知人に依頼して捜し当てたその屋敷は山川検校の所有するものであった。『瑣事録』によれば、この建物は山川氏が、旗本吉野氏^{〔注8〕}の屋敷地の一角を借りて建てたものである。旭荘は山川氏からこの建物を買ひ、これまでの山川氏と同様に地代を吉野氏に払うことにしたのである。旭荘および周囲の人物がこの屋敷を気に入った理由はふたつあったと思われる。ひとつは立地条件の好き、ひとつは建物の広さと格式である。いずれにしても長期戦になるであろう「仕官」の事を念頭においての選択であったのはいうまでもない。

なお、興味深いのは、旭荘は天保七年に堺に居を定めて開塾して以来、何度か転居しているが、これまでは、住居の周辺や間取りについてはほとんど記してはいないのである。しかし、今回は度を超して詳細なのである。それだけ思い入れが深かったということなのであろう。

まず、『瑣事録』の記述と当時の切り絵図「天保改正御江戸大繪圖」を参考にして、旭荘の屋敷の所在地を確認してみよう。5ページの図I^{〔注9〕}を参照されたい。

なお、『瑣事録』は漢文体の日記であるが、句読点や返り点が施されていないので、適宜読み砕いていくことになるが、筆者の誤読もあるかと思われるので、参考までに該当する部分の全文を掲げておく。

新居門前有一条溝横南北廣可四丈因潮盈涸西岸曰竈涯東岸曰久松涯兩涯通以数橋門北数歩有小橋河橋橋西商估所居地隸坊正橋東多諸侯及旗下士邸第吉野氏地余居在東北有牧野侯邸侯号遠江守南旗下某君第吉野氏地屬邸第間余與淳菴中分其地余居南淳菴居北而地主居東地皆百坪方六尺曰坪

旭荘が『鎖事録』に記す「濱街久松坊」は現在の浜町のことである。浜町とは、大川（隅田川）の両国橋下流の西側と浜町堀に挟まれた地域で、武家屋敷が並ぶこのあたりには本来は町名がないのであるが、この地域がかつて海辺

であつたので俗にそう呼ばれていたらしい。

当時の切り絵図を見ると、その浜町と呼ばれる武家屋敷区域の北部と町家との境目に久松丁と書かれた狭い町がある。しかし、実際にはこの区画だけではなく、隣接する武家屋敷区域の北部まで含めてそう呼んでいたと考えないと、旭荘の記述「濱街久松坊」に矛盾が生じる。浜町という町名自体が当時の通称であり、またその指すところが広範囲であるため、どこまでという区分は明確ではなかったのだろう。それ故、後述するように、浜町堀の東岸を久松河岸と呼んだりもしたのであろう。

「新居門前有一条溝横南北廣可四丈」(新居の門前にあつて幅が十二米程の南北に続く一条の溝)、これが浜町堀のことと思われる。浜町堀は大川の河口へと続いており、当時は現在よりもかなり海に近かつたはずであるから、「因潮盈涸」という記述のとおり潮の干満の影響を直接受けて水位が変わつたのだろう。旭荘の記述では、「西岸曰竈涯東岸曰久松涯両涯通以数橋」(浜町堀の西岸を竈河岸、東岸を久松河岸と呼び、幾つかの橋が堀の東西を結んでいる)とあるが、「竈(へつつい)河岸」とは、正確には浜町堀ではなく、竈堀の岸をさす。浜町堀から西へ入る、元吉原沿いの堀が「竈堀」である。つまり、旭荘が「橋西商估所居地隸坊正」(橋の西側は商人の居住地で町役人の支配

配下にあつた)と記している区域が元吉原である。その元吉原の住吉町、難波町南側の堀沿いが竈河岸である。

旭荘の新居は旗本吉野氏の屋敷地内であるから、「橋東多諸侯及旗下士邸第」(橋の東側は大名や旗本の邸宅が多い)とある橋(浜町堀)の東側で、町家のみが立ち並ぶ元吉原の竈河岸であるはずはないのだが、旭荘自身が詩題で「正月晦諸君集竈涯新居」としている。これは旭荘が誤つたのではなく、「濱街久松坊」と度々記しているのと同じで、武家屋敷区域には正式な町名がなかったことに因つて、いろいろな言い方がされたということなのだろう。少し遠方の者には「竈河岸」近辺と説明した方が理解しやすかつたのかもしれない。そのへんは鷹揚なものである。先にも述べたように、浜町の指す区域が広すぎるので、住居の所在地を説明する際に、便宜上、武家屋敷側も含めて付近の浜町堀東岸を久松河岸と呼んだり、「竈河岸」の向かい側と呼んだりしたものと思われる。

ともあれ、旭荘の家の西側には通りに面して門があり、その前は浜町堀であつた。そして敷地の北側は「牧野侯邸侯号遠近江守」とあるから、この切り絵図に誤りがないとすれば、「牧ノトヲくミ」とある屋敷地の南の「小ヤシキ」と記されている長方形の土地に吉野定五郎氏の屋敷はあつたということになる。切絵図でみると、その場所はちよう

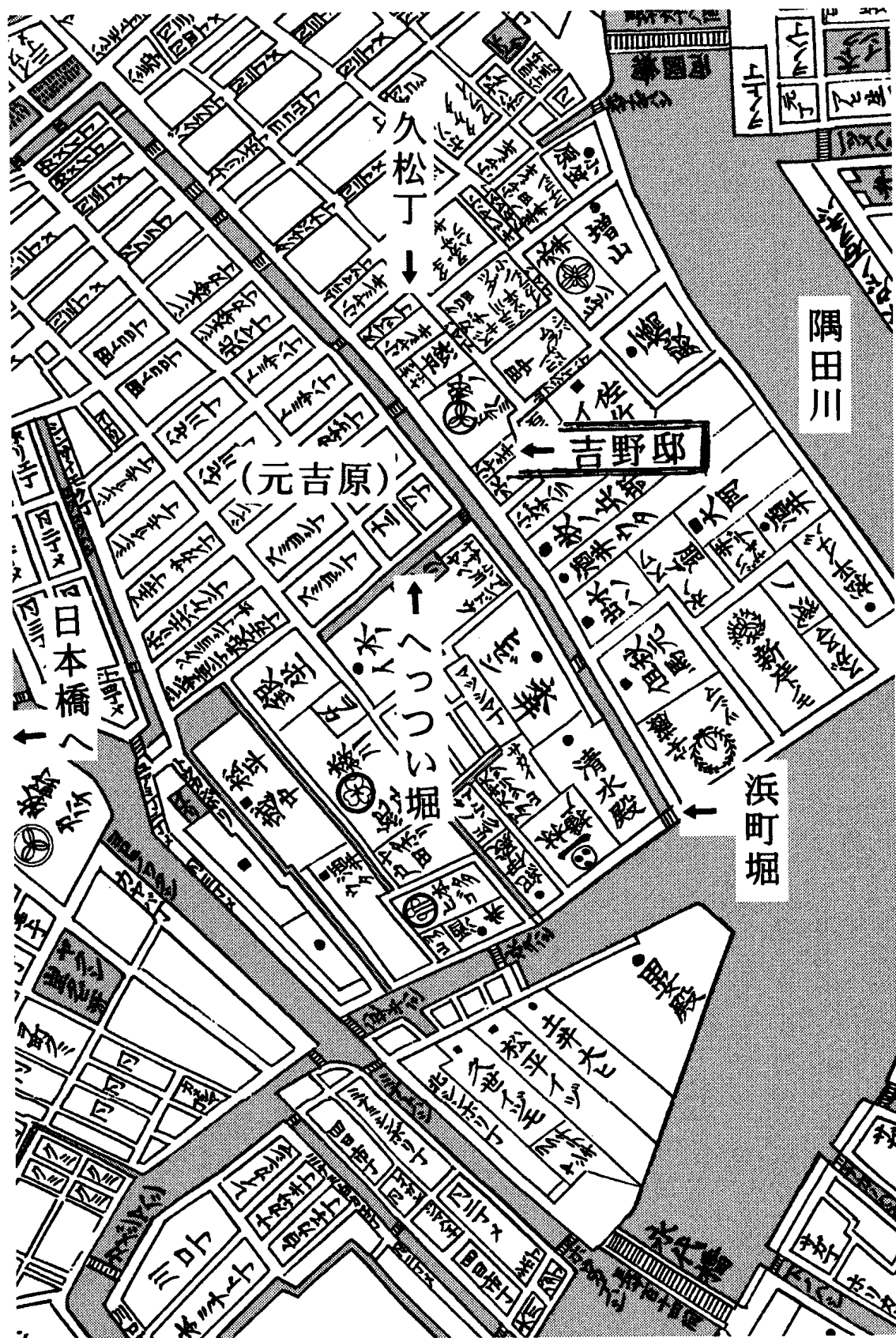


図 I

ど浜町堀を挟んで竈河岸の入口の対岸にあたる。

先に、この屋敷を選んだ理由として立地条件の良さを挙げたが、その点についても少し触れておこう。旭荘は、江戸に住む諸藩邸の武士、旗本、幕府の儒官・医官等と広く交際しており、そのつてを活用しつつ儒学を講じるつもりでいるわけであるから、あまり町家の多いような土地柄では具合が悪かったと考えられる。図のように浜町は大名や旗本の屋敷が並ぶ地域であつて、その点でも申し分がなかった。大身の大名家の並ぶ丸ノ内にも近く、身元保障など何かと頼らねばならない府内藩邸（神田の筋違門内）へも二軒程度、昌平坂學問所はそのすぐ先である。また、日本橋の書肆須原屋（『梅墩詩鈔』の出版元）^{〔注10〕}へは一軒ほどの距離、最も親交の深かつた坪井誠軒宅^{〔注11〕}のある深川冬木丁へも二軒程であり、いずれも徒歩圏内であつた。しかも、外出のために舟を利用する際にも都合が良く、閑静な土地柄である上に、両国や日本橋に近いこともあつて日常の物資の調達にも便利な場所であつた。

吉野氏の屋敷は、当時の御家人や微禄の旗本の屋敷地の平均的な広さとされる三百坪ほどのものであつたらしい。吉野氏はその土地を三分割して、みずから居住する区画を除き、他の二区画を医師塩田氏と山川検校に貸して、年間二十両ほどの地代を得ていたのである。おそらく、多く

の旗本が同様のことをしていたのだろう。『瑣事録』には、旗本の土地を借りる場合の手続きの方法が決まっている由の記述があり、地主吉野氏に教えられたとおりの手続きを踏んだことが書かれている。この時も、旭荘は府内藩の武士ということにして手続き進めている。

三

さて、屋敷およびその内部についての記述をみてみよう。これも全文を掲げておく。

余宅西南隅有一舍廣可設席九疊豎六尺横三尺曰疊中央即門也西北隅有廁門内有磚一道達式臺式臺横九尺縱六尺而玄関廣六疊玄関南有一室號曰第二室廣八疊玄関東有庖縱四疊横二疊蘭席與板床相半第二室東有第三室廣十二疊其東有第四室廣六疊玄関面西二室面西又面南三室面南四室面南又面東玄関及二室上有樓廣如其下庖東有倉横九尺縱一丈二尺倉有樓倉東有房婦女所居廣六疊房北有浴室横一丈六尺縱半焉房面南又面東浴室面北房前有庭縱二丈四尺横一丈二尺庭南有書齋廣八疊面東西北三方齋東隅附小室廣三疊面南其東隔以墻墻外即吉野氏也二三四室南有庭縱一丈二尺横四丈八尺凡戸牖皆面東南敞甚余從來所居未有此如廣且明也

敷地の西南隅には畳九枚を敷けるほどの広さ（板敷きの床

と思われる)の附属の建物がある。後にこれを改築し塾舎として使用したらしい。西側は浜町堀沿いの通りに面していて中央に門があり、西北隅には厠がある。門を入ると敷石が真つすぐに敷かれていて式台に至る。横九尺縦六尺(三畳分の広さ)という立派な式台に続いて畳敷きの玄関、南側に八畳間(第二室)、その東に十二畳間(第三室)、六畳間(第四室)が並ぶ。これらの座敷の北側つまり玄関の東側には大勢の者が飲食することが可能な庖(台所)があり半分は板敷きのまま、半分は蓆座か畳が敷いてある。その東には二階建の内蔵、さらに奥には房(婦人用の部屋)、その北側には浴室もある。玄関の間六畳とその隣の八畳間の部分には同じ広さの二階がある。庭には八畳間に三畳の小部屋のついた書斎がある。

『瑣事録』には床の間、廊下、納戸など細部の記述はないが、現存する江戸末期の建物を参考にして、各室の広さや位置関係が『瑣事録』の記述と矛盾しないように間取りを推測してみたものが次の図IIである。但し、庖の「縦四畳横二畳」は明らかに誤りで、「丈」でも「尺」でも寸法が合わないので、「縦四間横二間」とすべきところを誤って畳の数で記してしまったものと考えた。なお、当時の住居には、内廊下や押入はないのが普通であつたらしいのでそれに従った。

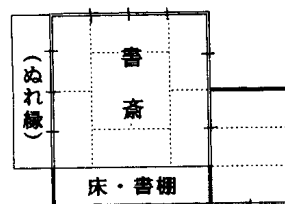
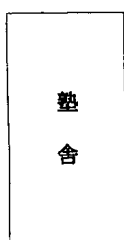
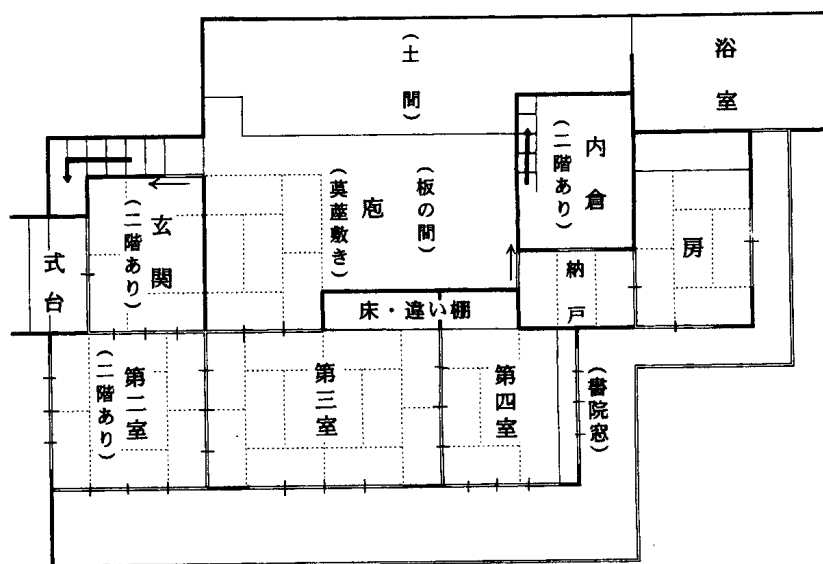


図 II

檢校は職業柄、多額の金銭を所有していたものと思われ、内蔵もあり、式台をもつその家の造りはかなり豪壮なものであったと推測される。山川檢校は常に、七八人の配下を置いていた（旭莊の転居の際にもまだ檢校配下の者たちが居住しており、双方のひと荷物で混乱を極めたことが『瑣事録』にみえる）というから、檢校の妻子、さらに女中や下僕を合わせると、十数人の者がその屋敷内で生活していたことになるだろう。旭莊が開塾するとなると、多くの門人が出入りすることとなり、中には寢食を共にする塾生もでてくる。当然、賄いの者や下働きの者も必要となる。山川邸はそれに対応できる十分な広さがあったのである。さらに小さいながらも庭に別棟の書齋もあった。旭莊は「凡戸牖皆面東南敞甚」（どの部屋も開口部が南向きや東向きで、とても広々としている）と手放しに喜んでいるのである。そして、「余從來所居未有此如廣且明也」（自分の今までの住居にはこのように広く明るい所はなかった）と結んでいる。

この山川氏の屋敷を購入するための具体的な動きは、十一月中旬から始まって、比較的順調に話は進んだらしい。『瑣事録』の記事を追ってみると、十一月十四日条に「議買宅事」とあるのが始めて、翌十五日には蘭法医伊東玄朴が来て「聞市川米菴將遷其宅地主羽倉公也……先生蓋買米

菴宅也」（聞くところによると、羽倉氏の屋敷地を借りている市川米菴が転居するようだから、その家を買ったらどうか。）と強く勧め、頼三樹三郎を羽倉家への使者に立てることにしている。しかし、十八日には既に旭莊と大竹蔭塘の会話の中で、候補地として「濱街」という言葉が出ているところを見ると、それ以前に山川邸のことはその北隣りに住む塩田順菴（注12）の口から話題に出ていたのだろう。翌十九日にもこの件について相談している。

そして二十二日条には「秀平来曰、既與信道塩田順菴定議、將買濱街山川氏宅矣」（秀平、信道、順菴とが山川氏宅を購入すべきことを決めた）ことが報告され、二十四日に順菴から、「既與山川氏成約買其宅、直八十金、君須過地主吉野氏告」（代金八十両で山川邸を買う契約は成立したから、地主の吉野氏に挨拶に行くように）と告げられた、という具合である。話が始まって幾日も経ないうちに、八十両という大金、さらに地代の十両、一部改築の費用、挨拶廻りの金品など、百両前後の費用が必要だったはずであるが、金に糸目をつけた形跡はみられない。仕官が叶えば当然、国許なり江戸藩邸内なりに転居するわけで、それまでの住居に過ぎないとはいえ、大名に招聘される儒者に相應しい住居を探し得たのである。

なお、羽倉氏も吉澤氏も貸すべき屋敷地をもっていたよ

うで、旭莊の住居探しの候補地にあがっていたことは既に見たとおりである。しかし、これらの屋敷について本人が積極的に動いた様子はみられない。しかし、気に入ったはずの山川邸についても、周囲の者が選び、そして決定したかのように、そっけない記述なのは、両氏に対しての遠慮があったからだろう。『瑣事録』は人目に触れることを前提に書いているようで（実際に複数の人が写したり読んだりしている）、心情表現などは意図的に押さえている節がある。

十二月二十四日に支払いを済ませて売買は成立し、宅券を得たが、未だ官免が下りていなかったことを憚って、旭莊は修理氏の家に宿泊し、新居には秀平と玄菴とが泊まったとある。旗臣の屋敷地を借りるには幕府の許可、つまり「官免」を得なければならないが、その手続きは、貸し主の旗本（御家人）が自分の所属の長（吉野氏の場合は小普請組支配の大岡氏）に、借り手の姓名と所属を上告し、担当の官吏が借り手の所属に向いて、本人の实在を確認する程度のことであつたらしい。

四

旭莊はこうして、のちに「肅舎」と名付ける新居を得て、江戸に腰を落ち着けることとなったのである。年末の

広瀬旭莊の天保十五年正月詩の周辺

転居で慌しかったようだが、開塾や講義のこともこの時点では未だ具体化しておらず、比較的心安らかな新年であつたようである。旭莊は毎年、元日に五言律詩を賦しているが、天保十五年のものは、これまでの数年間のものとは趣を異にしている。俗世間のことに煩わされない満ち足りた心境や、隣人との交わりを楽しむ生活が詠まれている。それ以前の元旦の詩の特徴的な部分を抜き出してみよう。

天保十年 「己亥元日」 五言律詩

：一身誇健壯 萬國仰昇平
無復煙雲起 中天麗日明

同十一年 「庚子元日」 五言律詩

昔稱三代治 恐遜我昇平
閭里多耆老 邦家並富榮

同十二年 「辛丑元日」 五言律詩

：連年遇豐熟 卅日益韶華
同十三年 「壬寅元日」 五言律詩

：天光熙鳥意 國政協民心
聞說群賢進 驚才勉自今

同十四年 「新年偶成」 七言律詩

政化烝烝二百秋 更忻新澤洽遐陬
昇平有象倡優拙 大道無私姦吏愁

右に列挙したようにこれまでの新年の詩の多くには、『萬國仰昇平』『恐遜我昇平』など、『懷風藻』中の応詔詩をみるような何やら面映ゆい語句が使用されている。無論、ここには国政に対する旭莊の興味が仄見えるのであるが、それは、その時点で「仕官」(国政参画)ということが現実のものとして目前にあったからに他ならない。特に、天保十三年、十四年のものにはそれが一層顕著となり、旭莊の意気込みを示す語句も付加されるのである。

天保十二年五月から水野忠邦による改革が本格的にスタートすることになるが、旭莊が『瑣事録』に、その直前の三月十三日に水野家の家臣である儒者春田玄藏からの手紙が来たことを記した後、わざわざ「公欲徵余命玄藏問余所欲」(水野公は私を召し出そうとして、玄藏に私の気持ちを問わせた)と注記しているのが注目される。天保十二年六月七日、再び春田玄藏からの手紙が届く。前掲詩中の天保十三年元日の「聞説群賢進 驚才勉自今」(聞くところによれば、野に在る賢人が多く徴し出されるようだ。非才の己も今から一層の努力をしよう)の句などは、そのことと直接結びつく表現とみてよいだろう。

老中水野の下には、旭莊最員の羽倉簡堂がいた。水野が羽倉に命じたか、羽倉が水野に推挙したのが先か不明であるが、水野が旭莊を召し出そうとしていたのは確かであ

る。水野は既に天保二年に塩谷甲藏を、天保十一年には塩谷量平(二十年余りのち幕府の儒官となる)を召し抱えるなど、改革を宣言する以前から人材の登用を積極的におこなっている。量平は『瑣事録』の天保十一年七月十四日条に「遠州浜松儒臣塩谷甲藏弟量平者来見」と記されて以降、同月二十三日、九月二十七日、翌年一月十九日、三月三十日、と度々旭莊のもとを訪れている。これらの記述と『梅墩詩鈔』中の元日詩にみえる表現とを考えあわせると、この頃既に仕官に関しての打診が水面下で行なわれていたとも推測される。なお、旭莊は天保十一年十月三日に羽倉簡堂へ手紙を出している。また、翌年四月二十五日にも塩谷量平に羽倉簡堂への手紙を託している。この件に関して羽倉とも幾度も遣り取りがあつたものと思われる。

旭莊は、かつて江戸へ出た際(天保八年二月下旬から五月中旬までの二ヵ月半)、多くの文人に会い、また羽倉氏の紹介で、幕府の儒官や林氏にも面会している。その時に何らかの手応えを感じ取つたとみえて、そのあと、天保十年あたりから、いきなり、先に列挙したような天下国家の政治にかかわるような表現が出てくるのである。『梅墩詩鈔』をみると、旭莊は天保二年元日以来、毎年元日の詩を賦しており、『詩鈔』にそれが収められていないのは天保六年のみであるが、以前には政治や世の中のことを表現す

るような語句は全く見られなかったのである。せいぜい、天保七年の作に、「謳歌閭里遍、喜作太平民」と太平を謳歌する句があるくらいである。

五

さて、前掲詩にみられるような意気込みをもって江戸へ出た旭荘であったが、天保十四年秋、水野と羽倉の失脚によって、最も可能性の高かった水野家もしくは幕府への仕官は一応沙汰止みとなった。しかし、諸藩への推挙の話もいくつかあり、仕官の望みは絶たれたわけではなかったのである。江戸に腰を落ち着ける決心をした旭荘にとって、翌十五年正月はまことに穏やかな心境で迎えた正月であった。その心境と新居に対する満足とが、次の詩の表現を生んだのである。

甲辰元日

生年三十八 生年三十八にして
始遇大都春 始めて遇ふ大都の春
帯柳營門邃 柳を帯びる営門は邃かにして
挿松侯第均 松を挿すこと侯第は均し
猶無人事擾 猶、人事の擾ひなく
轉覺我心醇 転覺ゆ、我が心の醇なるを

広瀬旭荘の天保十五年正月詩の周辺

家眷安寧否 家眷 安寧なるや否や
望西祈拜頻 西を望んで祈拝すること頻りなり

和大醫鹽田君所贈韻余新移居君南隣

平生素願一朝伸 平生素より願ふ一朝の伸
卜築求隣得好隣 卜築して隣を求め好隣を得たり
器慣互通難認主 器は互通に慣れ主を認め難く
詩經相正後呈人 詩は相正すを経て後に人に呈す
書聲隔壁共殘夜 書聲は壁を隔てて殘夜を共にし
杏杪跨垣分半春 杏の杪は垣を跨ぎて半春を分つ
荆婦西來期在近 荆婦の西來の期は近きに在り
更祈尊眷往還親 更に祈ふ尊眷往還して親しきを

正月晦諸君集竈涯新居

江都家百萬 江都 家百万
我舍獨蕭然 我が舍 独り蕭然たり
鳥啄疑敲戸 鳥啄せば戸を敲くかと疑ひ
苔敷空作錢 苔敷きて空しく錢を作す
微肴謀一酌 微肴もて一酌を謀り
高駕枉諸賢 高駕の諸賢を枉ぐ
和氣何氤氳 和氣何ぞ氤氳たる
滿堂春燭烟 滿堂春燭の烟

本稿は標題の示す通り、天保十五年正月の詩の周辺を
探ったのみで、その内容に解れることはできなかった。こ
れらの作品からみてとれる心境は、翌月の「題春川釣魚
図」へと繋がっていくものであることは言うまでもない。

【注1】表紙には『日間瑣事備忘』とあるが、旭莊は日記本文中
で「瑣事録」と称し、詩題にも「題自著瑣事録」（『梅墩
詩鈔』三編三卷中の詩）としているので本稿でもこれに
従う。

【注2】羽倉簡堂 水野忠邦の下で経済改革に手腕を振るった旗
本。父が西国郡代として日田に赴任したのに従って西国
に遊学した。旭莊が生まれた時にその命名を依頼される
など、古くから広瀬家とかかわりがあった。

【注3】拙稿「広瀬旭莊の題画詩『題春川釣魚図』の手法」（『文
芸と思想』第六十六号 平成十四年二月）

【注4】仕官先の選択意識については、鈴木瑞枝氏の論（『江戸
滞在中の広瀬旭莊について』安田学園紀要二五 一九八
五年三月）に詳しい。

【注5】『瑣事録』十四年五月十二日条に「假為府内臣」とある。
広瀬義右衛門と名乗った。兄南陔、府内藩家老岡本治兵
衛、藩士平井十兵衛、藤田廉平、藤田平次兵衛と共に上
途することになり、旭莊は門人の古谷秀平、時任龍太
郎、西島孫吉の三人を従えた。

【注6】久兵衛の従者と旭莊の門人も一緒であったことから、あ
る程度の広さはあったらしい。

【注7】吉澤雄之進 十二年前に西国郡代の配下として日田に居
たことがあり、旭莊と親交があったらしい。（『瑣事録』
六月九日条）住居は小名木川沿いの徒士屋敷（大橋を
渡って一軒余り）にあった。

【注8】旗本吉野定五郎の名は『瑣事録』にたびたび登場するが
本名は不明。小普請組で大岡氏の配下であったことが
『瑣事録』に注記されている。

【注9】図Iの地図は人文社の複製『江戸大繪圖集成』中の「天
保改正御江戸大繪圖」をもとにしている。

【注10】須原屋茂兵衛 淡窓の著『析玄』の出版の相談などでし
ばしば立ち寄ったことが『瑣事録』にみえ、書籍を借り
たりなどもしている。

【注11】坪井信道（誠軒） 蘭方医。彼の私塾ではオランダ語も
教えた。若い時に長崎に遊学した際に、日田の広瀬淡窓
のもとに滞在した縁で、江戸に出た旭莊と親交を結び、
何くれとなく相談に乗った。また、誠軒の長男と養子信
良は旭莊のもとで漢学を学んだ。

【注12】鹽田順菴（松園） 儒者であり幕府の医官でもある。旭
莊は始め誤って『瑣事録』に「淳菴」と記している。